

修士論文(要旨)

2017年1月

大学生の家族機能とソーシャルスキルおよび抑うつとの関連

指導 山口 一 教授

心理学研究科

臨床心理学専攻

215J4002

江口 慧

Master's Thesis (Abstract)
January 2017

The Relations among Family Function, Social Skills, and Depression in Undergraduate
Students

Aki Eguchi

215J4002

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

I. 問題と目的	1
II. 方法と手順	1
III. 結果.....	2
IV. 考察.....	2
引用文献.....	I
資料	i

I. 問題と目的

坂本・丹野・大野 (2005)によると、10歳以上を対象に抑うつ状態を測定する Center for Epidemiologic Studies Depression Scale (以下 CES-D と示す)を用いた調査によると、15歳から24歳の年齢での抑うつ得点が高齢より高い結果となった。この抑うつがどの要因から来るのかを調べることは青年期の危機状態を軽減する上で重要である。家庭には、人間関係のトラブルが抑うつに至る過程を抑える機能があると考えられている。家庭は子どもにとって、親と親密で情緒的絆で結ばれた砦であり、巣立っていくための基地である。家庭の働きが機能しているとき、家庭は子どもにとって安心して過ごせる空間であり、甘えたり、困ったりするときにありのままの自分を出することができる(増田・山中・武井・平川・志村・古賀・鄭, 2004b)。さらに、子どもが家族機能が悪いと評価している場合は、心身症の増症や抑うつ的になる(吉野・笹原・立川・服部・飛鳥田・森田・松崎・吉川, 2005; 西出・夏野, 1997)。

子どもに限らず、青年期にある大学生にも様々なストレスが存在するが、そのうちの対人関係は、精神的健康に影響を与える重要な因子である。その対人関係を良好にする因子としてソーシャルスキルの存在が挙げられる。ソーシャルスキル(Social skills)とは、具体的な対人場面で、学習によって獲得され適切かつ効果的に反応をするために用いられる言語的・非言語的な対人行動と、適切かつ効果的に反応するための認知過程の両方を包括する概念である(相川・津村 1996)。戸ヶ崎・坂野(1997)は、ソーシャルスキルの形成に親の養育態度が影響していると指摘した。

以上のことから、家族機能の影響により、ソーシャルスキルの取り方に違いがあると予想され、家族機能が不良と評価する人は、ストレス低減のために他の人からのサポートを減少させるソーシャルスキルを使用し、それによってさらにストレス反応が高まるという負の経過を辿ると考えられる。

本研究では、大学生を対象とし、このような負の過程が存在しているのかを検証するために、大学生からみる家族機能とソーシャルスキルと抑うつとの関連を明らかにすることを目的とする。①家族特性評価尺度とソーシャルスキル自己評価尺度とは関連があり、この二つは、CES-Dとも関連する。具体的には、家族特性評価尺度の得点が高く良好であると、CES-D 得点が低くなり、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の得点が高くなる。また、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の得点が高いと CES-D の得点は低くなる。②性差については以下の通りに仮定する。家族特性評価尺度においては、女性は母親との関係によって情緒的繋がりが強く、家族特性評価尺度の得点が高くなることが考えられる。そのため、男性より、女性の方が家族機能の得点が高いことが考えられる。成人用ソーシャルスキル自己評定尺度に関しては、先行研究により「主張性」「感情統制」と「ソーシャルスキルの6尺度平均値」は男子の得点が高く、「記号化」においては、女子の方が得点が高い。CES-Dの得点に関しては、CES-Dを開発した島・鹿野・北村・浅井(1985)の研究では、男性の方が女性より平均得点が有意に高かった。よって、CES-D に関しては男性の方が得点が高い。③共分散構造分析では、家族特性評価尺度の得点が高い場合は、CES-D の得点が低くなる。また、成人用ソーシャルスキル自己評定尺度が高くなる。成人用ソーシャルスキル自己評定尺度が高い場合、CES-D の得点が低くなる。

II. 方法

対象者は、A 大学及び、B 大学に在籍する18歳～24歳までの男女学生である。

まず、A 大学とB 大学で教えている教員に教員宛て調査協力依頼書、承諾書、学生宛て調査協力依頼書、質問紙の文書を携え、文書・口頭にて説明し、調査への承諾書を頂いた。調査への承認を得られた教員の講義終了後時に、対象者に調査協力のお願いと質問紙の文書を一人一部ずつ封筒に入れて配布し、口頭説明を5分程度行った。説明の内容は、調査の趣旨、目的、対象、調査方法、プライバシーの保護また調査拒否の自由、調査を拒否した際にも、成績の評価に関係がないことである。対象者には無記名で回答してもらい、当日または翌週の講義終了後に回収した。

質問紙の構成は、1. 対象者に関する質問項目(年齢、性別、学年を問う項目)2. 家族特性評価尺度(杭瀬・三澤, 2003)12項目 3. 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田, 2005)35項目 4. Center for Epidemiologic Studies Depression Scale 日本語版(島他, 1985)20項目である。分析方法には IBM SPSS Ver. 23.0を用いた。全ての尺度の尺度間の相関係数を算出し、家族特性評価尺度、成人用ソシヤ

ルスキル自己評定尺度, CES-D の間の相関を検討する。また, 各尺度に男女の平均値に差がないのかを確かめるため, t 検定を行う。さらに共分散構造分析を行いパス図を作成し, 家族機能がソーシャルスキルを介して CES-D に影響を与える場合と家族機能から直接 CES-D に影響力の大きさを評価する。

III. 結果

質問紙は 500 部配布し 465 部を回収した。(回収率 93%)。有効回答は 368 部(有効回答率は 79%, 男性 143 名(39%), 女性 225 名(61%), 平均年齢は, 19.67 歳, SD=1.25)であった。

家族特性評価尺度, 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度, CES-D の 3 つの尺度について, 性差の分析のため t 検定を行った結果, 情緒的結合因子($t=2.00$, $df=328$, $p<.05$)と記号化($t=2.26$, $df=366$, $p<.05$)については, 男性より女性の方が 5%水準で有意となった。

相関分析ではまず, 家族特性評価尺度の下位尺度である「円満因子」($r=-.35$, $p<.01$), 「情緒的結合因子」($r=-.31$, $p<.01$)とそれぞれ CES-D と弱い負の相関が示された。次に成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の下位尺度である「関係開始」($r=-.38$, $p<.01$), 「主張性」($r=-.23$, $p<.01$), 「関係維持」($r=-.23$, $p<.01$), 「記号化」($r=-.27$, $p<.01$)と CES-D とは弱い負の相関が示された。

共分散構造分析では観測変数と潜在変数との影響関係に関しては, 「家族機能評価尺度」から「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」に正の影響(0.43), 「CES-D」に負の影響(-0.20)が見られた。また, 「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」から「CES-D」に負の影響(-0.35)がみられた。家族機能の CES-D への間接効果の値は成人用ソーシャルスキル自己評定尺度を経由した場合が-0.15となった。家族特性評価尺度から成人用ソーシャルスキル自己評定尺度への説明変数は 18%であり, 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度から CES-D への説明変数は 22%となった。

適合度指標をみてみると, GFI=0.96, AGFI=0.93 と 0.9 以上であり, かつ GFI の数値との開きも少ない。また, RMSEA に関しても, 0.076 と一般的に許容範囲とされている.01 を下回る数値が示されており, 368 名というサンプルの多さから χ^2 は有意となっているが, このモデルは許容される数値となっている。($\chi^2(17)=49.514$, $p=0.01$, CFI=0.97, RMSEA=0.076, SRMR=0.417, RMR=0.14, GFI=0.97, AGFI=0.93)。

IV. 考察

まず, 「家族特性評価尺度」から「CES-D」へは有意な負の影響があった。このことから, 家族特性評価尺度が低いと CES-D が高くなる, つまり家族機能が悪く, 抑うつ状態になることが考えられる。また, 「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」から「CES-D」にも有意な負の影響があった。このことから, 対人場面でソーシャルスキルを適切に使用していると, 抑うつ状態が低くなる可能性が考えられる。「家族特性評価尺度」, 「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」からそれぞれ「CES-D」へのパスが立証され, 「家族特性評価尺度」と「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」, 「CES-D」への関連が示された。

「家族特性評価尺度」から「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」へは有意な正の影響があった。このことから家族機能が良好であると, 対人場面で適切なソーシャルスキルを使用している可能性が考えられる。「家族機能評価尺度」と「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」へのパスは有意であり, 「家族特性評価尺度」, 「成人用ソーシャルスキル自己評定尺度」を経由して「CES-D」と関連するパスが立証されたことから, 仮説 3 は支持されたとと言える。

家族特性評価尺度から成人用ソーシャルスキル自己評定尺度への説明変数は 18%であり, 成人用ソーシャルスキルから CES-D への説明変数は 22%となった。このことから, 家族機能以外の部分でソーシャルスキルは決まる部分が多いこと, ソーシャルスキルが抑うつ状態に与える影響があることが分かり, 教育によるソーシャルスキルトレーニングの有効性が示唆された。

引用文献

- 相川 充・津村 俊充 (編) (1996). 社会的スキルと対人関係: 自己表現を援助する 誠信書房.
- 相川 充・藤田 正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要, *56*, 87-93.
- 杭瀬 智子・三澤 咲美 (2003). 日本における家族特性評価尺度の作成 臨床死生学年報, *8*, 30-49.
- 増田 彰則・山中 隆夫・武井 美恵子・平川 忠敏・志村 正子・古賀 靖之・鄭 忠和 (2004b). 家族機能が学校適応と思春期の精神面に及ぼす影響について 心身医学, *44* (12), 903-909.
- 西出 隆紀・夏野 良司 (1997). 家族システムの認知は子どもの抑鬱感にどのような影響を与えるか 心理学研究, *45* (4), 90-97.
- 坂本 真士・丹野 義彦・大野 裕 (2005). 抑うつ of 臨床心理学 東京大学出版会.
- 島 悟・鹿野 達夫 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, *27*(6), 717-723.
- 戸ヶ崎 泰子・坂野 雄二 (1997). 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応におよぼす影響 教育心理学研究, *45* (2), 173-182.
- 吉野 聡・笹原 信一郎・立川 秀樹・服部 訓典・飛鳥田 菜美・森田 展彰・松崎 一葉・吉川 麻衣子 (2005). 家族機能と思春期問題発症との関連に関する研究: 筑波研究学園都市における 5 年毎の横断調査結果より (第 5 報) 思春期学, *23* (2), 234-242.

